

羞恥感情を引き起こす状況の構造

——多変量解析を用いて——

成田 健一

寺崎 正治・新浜 邦夫

1. はじめに

「羞恥」感情は、心理学の中でも研究対象として取り上げられることが少なかった話題の1つである。従来は一部の研究者が「恥ずかしさ (Shyness)」について研究をおこなうに留まっていた。中でも Lewinsky (1941) の研究では、臨床に関連した話題を提供し、今日の研究において高い関心を集めるようになったいくつかの問題を提示している。わが国においても従来はわずかに園原 (1934)、森口 (1953) らの研究が見られる程度で、近年になるまで羞恥に関する心理学的研究は少なかった。

恥ずかしさ (Shyness) が心理学の中で特に大きく注目を集めることになったのは、Zimbardo (1977) が中心となっておこなった Stanford Shyness Project からであったと言えよう。この調査では、数ヶ国にわたって5000人にもおよぶ件数のデータを収集した。そしてある個人が恥ずかしがりや (Shy) であるか否かを判定する質問紙を作成し、さらに恥ずかしさ (Shyness) に関連した思考、感情、行動、身体的特質、あるいは恥ずかしさ (Shyness) の生起する状況、その時の状態、その原因、などを調査し整理した。この調査によると、アメリカ合衆国において過去のある時点あるいは現在、いくらかでも自らを恥ずかしがりや (Shy) であると評定した人は全体の80%までをも占めるという結果を得

ている。これは恥ずかしさ (Shyness) の現象が、非常に一般的であることの一例として捉えられている。またこの計画は、恥ずかしさ (Shyness) に思い悩む人に対する臨床的応用を考え、研究をおこなってきた。つまり、対人接触場面における引き籠りや自己主張ができないことは、アメリカに代表される社会においては社会的に不適応をもたらすと考えられ、このような行動についての治療を提供することが最終的な目的とされていたのであった。まさにアメリカに代表される社会あるいは文化を背景に持つ研究であったと言えよう。そしてこの研究をきっかけに、恥ずかしさ (Shyness) を主題とした研究が多くなされるようになってきたのである。

しかしここで、その後の恥ずかしさ (Shyness) の研究に多くの混乱をもたらすことになったいくつかの問題点を指摘しておかねばなるまい。それは、第一に恥ずかしさ (Shyness) と言う語が内包する意味内容のあいまいさの問題、第二に臨床的応用を離れた基礎的なデータ収集の問題である。

まず第一の問題であるが、恥ずかしさ (Shyness) という語はアメリカでも日常語として使用されてきた語であり、いわゆる心理学の学術用語ではない。Zimbardo は恥ずかしさ (Shyness) についてあえて定義をせず、「あなたは恥ずかしがりやですか」という質問に対する応答で、その個人の恥ずかしさ (Shyness) の程度を判断していた。そして Zimbardo 同様、多くの研究が定義の問題をあいまいにしたままなされている傾向がある。Zimbardo 自身その点は承知しているが、臨床的応用を第一の目標と考え、厳密な定義よりもむしろ恥ずかしさ (Shyness) の全体像を把握することの方が重要であると判断したため、定義のあいまいさを黙認しているのであろう。

しかし、定義があいまいであるため次のような問題点が生じてきた。例えば、ある状況におけるある個人にとって、主観的状态では羞恥を経験しているにもかかわらず、社会的行動はまったく抑制されてはいないという事例が存在し得るのである。その逆もまた同様に存在し得るのであろう。事実、恥ずかしさ

(Shyness) と社交性 (Sociability) の関係を検証した Cheek & Buss (1981) の研究では、主観的には羞恥を経験していても、社交的に振舞うことのできる人 (Shy-Sociable な人) の存在を確認している。さらにわが国においても、対人不安傾向とその行動に関して同様の知見が菅原 (1988) により示されている。すなわち、外顯的行動で羞恥を定義することがよりよい方策であるとは必ずしも言えないのである。もちろん感情状態と行動との間には関係があるが、いつも両者が1対1に対応しているわけではなく、この両者はあくまでも異なった現象として捉えるべきであろう。従来多くの研究者は感情状態と行動を共に扱ってきたが (Buss, 1980; Clark & Arkowitz, 1975), 羞恥に関する研究をおこなう場合には、これらの内どちらに焦点をあてるのかという点を明確に示す必要がある。したがって、感情状態と行動を分離して初めて、定義が概念的にも方法論的にも明確になるものと考えられる (Leary, 1982, 1983)。

次に第2の基礎的データ収集の問題である。前述したように、Zimbardo の計画そのものが臨床的応用を目指していたため、現状では基礎的なデータの収集が立ち遅れている。上記の感情状態と行動の問題に関連させて言うならば、後者の「行動」の変容に重きをなす研究が多いのに対して、感情状態に着目する研究はさほど多くはないのである。したがって感情状態に着目し、その基礎的データを収集する必要性は大きい。そこで本研究ではこの感情状態に着目してみたい。

2. 問 題

主観的感情状態としての羞恥に着目した場合、「羞恥」という言葉に代表される感情状態を表現する言葉には、内気、はじらい、恥辱、当惑などの多様な表現があり、それぞれ微妙に異なった意味内容が盛り込まれていることを再認識させられる。これは必ずしも日本語独特の現象ではなく、英語においても日

本語同様の傾向を示しており、Shame, Shyness, Embarrassment, Timidity, Audience anxiety 等のそれぞれ微妙に異なった多様な表現が存在する。

このように日本語においても英語においても、多様な表現があることから、「羞恥」と呼ばれる感情状態は単純で一様な感情状態ではないことが推測される。ではこの羞恥という言葉で代表させた感情状態が、微妙に異なるという事実はどういった要因に基づくものであろうか。

おそらくこれらの感情状態の差異を考えていく際に1つの鍵となる概念が場面状況であろう。羞恥に限らず、感情は主体の経験に対する反応としてとらえることが可能であり（木村, 1978）、その反応はある種の刺激によって引き起こされると考えられる。したがって、一定の刺激、すなわち、ある状況において生起する主観的経験としての感情状態を研究することにより、感情状態の差異も明かになるのではないだろうか。事実日常生活でわれわれは、上記の多様な表現をその場その場に依じて使い分けている。すなわち、羞恥を引き起こす状況であっても、状況により異なる感情状態が作り上げられるという可能性が生じるのである。

近年羞恥に関する研究の中には状況の重要性を示唆する研究もいくつか存在する（Crozier, 1986 ; Teglasi & Hoffman, 1982）。しかし、羞恥を引き起こす状況に関する研究は、Russell, Cutrona, & Jones (1986) が指摘するように、羞恥研究の中でも主流を占めていたわけではない。特に実証的データに基づく羞恥感情を引き起こす状況に関する包括的で系統的な分類研究は少なく、その結果、状況的要因を中心に据えた羞恥に関する理論的研究は例をみないのが現状である。

そこで本研究では、まず羞恥感情を引き起こす様々な状況を収集し、その整理を試みる。次に状況を精選し、それらの状況を多変量解析を用いて分類することを試みる。そして従来の羞恥を引き起こす状況の分類に関する研究との比較検討をおこなう。

3. 予 備 調 査

羞恥を引き起こす状況に対して数量的、客観的処理をおこなうために、予備調査においては、まず羞恥を引き起こす状況を多数収集することを目的とする。

① 方法

被調査者：大学生131名（男子70名，女子61名）および女子看護学校生51名であった。女子看護学校生のうち11名は25才以上であったので，被験者の年齢的等質性を考慮し，分析には算入しなかった。その結果，171名（男子70名，女子101名；平均年齢 20.6才，年齢幅 18～24才）の被調査者のデータを分析に用いた。

手続き：自分が羞恥を経験した具体的状況を自由記述させ，羞恥を引き起こす状況を収集した。被調査者に記述を求めた状況の個数は特に制限を設けず，できるだけたくさん記入することを求めた。また，質問紙記入のための制限時間も設けなかった。

② 結果

総計2070例の状況を収集した。この状況を整理するために，従来の研究で用いられている Sattler (1965)，および Sattler に準じた橋本 (1980) の方法に従い，羞恥感情を引き起こす状況を39のカテゴリに分類した。分類作業は男子1名，女子2名の計3名でおこなった。分類の一致率は90%以上であったが，不一致の点は協議の上，いずれかのカテゴリに分類した。

ここで用いた Sattler の分類は，ある状況において羞恥を経験した個人 (P) の行動に着目している。すなわち，羞恥を経験した個人が行為の主体であるか

(カテゴリ I, II), 他者 (O) の行為の受け手であるか (カテゴリ III), あるいは他者の行為の観察者であるか (カテゴリ IV, V) という観点から状況の分類をおこなっている。各状況は、まず大きくこれら大カテゴリおよび分類不能 (カテゴリ VI) のいずれかに分類され、その後 39 の小カテゴリに分類された。この分類結果を Table 1 に示す。得られた結果は基本的に橋本 (1980) の結果と異なるものではなかった。

Table 1 羞恥を引き起こす状況の頻数分布表

カ テ ゴ リ	計
I—Pは行為者である	
1 身体像	23
2 社会的に不適當な服装	17
3 身体/衣服:一般	104
4 異性	62
5 身体/衣服:異性	1
6 セックスについて話すること	4
7 ぶざまな行為	546
8 情動	11
9 悪い成績/テストの失敗	45
10 名前を忘れること	1
11 誤りを言うこと	25
12 金 銭	32
13 権威の存在	7
14 個人的な持ち物	11
15 プライバシーをもらすこと	13
16 無能力:一般	393
17 目立つこと	147
18 精神病患者/入院中	0
19 偶然や環境の出来事による影響	1
20 非生命的な力による影響	0
II—PはOを否定的な立場におく	
21 気まずさ/不適當	7
III—OはPと相互に作用している : Pは受け手である	
22 批判される/拒否される	10

23	賞賛される	20
24	人目につくようにさせられる	53
25	プライバシーを侵害される	63
26	体／衣服のプライバシーを侵害される	112
27	知識の欠如／無能力をさらされる	83
28	からかわれる	21
29	異性	15
30	セックスについての話	1
31	(他人の)体がさらされる	3
32	不 適 当	19
IV-OはPに不名誉となる何かをする		
33	人間による不都合	28
34	動物による不都合	3
35	OはQに対して不都合	0
36	OとQは親密さを示している	5
V-PはOのために恥ずかしい思いをする		
37	親類／親密な友人	10
38	未知の人	13
VI-分類不能		
39	分類 不 能	161
総 計		2070

しかし Sattler の作成した39の小カテゴリは、多分に思弁的なものであり、必ずしも客観的で十分な分類であったとは言えない。また彼の分類カテゴリでは、非常に曖昧で多くの意味を持つカテゴリ（例：カテゴリ7）と非常に限定された意味しか持たないカテゴリ（例：カテゴリ18^(註)）が並存しており、各小カテゴリごとにその頻数のみを単純に比較することは問題がある。そこでこうした問題点を解決するためにも、予備調査において収集した状況から代表的な状況例を選出し、その状況における羞恥の程度を問う必要がある。

註 Sattler の研究目的の1つに、精神分裂病者と健常者の比較という目的があったのでカテゴリ18が使用されたと考えられる。が、39の分類の中にこの分類項目が本質的に必要であったのかという点については疑問が残る。

4. 本 調 査

羞恥感情を引き起こす状況について、系統的に状況を収集し多変量解析を用いて分類した研究は少ない。欧米では、わずかに Modigliani (1968), Edelman (1985), Edelman & McCusker (1986) らの照れ・当惑 (Embarrassment) 状況に関する研究が見られる。しかし、彼らの研究は状況そのものに着目しておこなわれたものではない。またその結果は必ずしも一致していない。その他 FSS (Fear Survey Schedule) を用いた多くの研究がなされているが (Crozier, 1979, 1986参照), これらの研究は、ある刺激に対する (ある状況における) 恐怖の程度を指標としているのであって、必ずしも羞恥そのものを対象としているとは言い難い。

わが国では、橋本らが羞恥を対象として、発達の観点や比較文化的観点もとりいれ被調査者の対象を幅広くとり、因子分析を用いて多角的に研究をおこなっている (橋本, 1986; 橋本・清水, 1981, 1982, 1984; Hashimoto & Shimizu, 1988)。中でも被調査者が大学生の場合、12もの因子の存在を確認しているが、大別すると、性、異性に関する因子群 (性羞恥)、内省に関する因子群 (内部志向的羞恥)、無能力露見、注視、思い違い、きまり悪さといった因子群 (外部志向的羞恥) の存在を指摘している。一方菅原 (1989b) は、大学生を対象として自己を意識する状況、すなわち対人的不安状況に関して、主観的な情緒反応のパターンをクラスタ分析で類型化し、「恥辱感」、「照れ」、「対人緊張」、「対人困惑」という4つのカテゴリを見いだしている。菅原はそれらの内、前2者を自己呈示の結果に対する不安とみなし従来の「恥」意識として捉え、後2者を自己呈示の過程に対する不安であり、コミュニケーション不安として捉えている。これらの研究が対象とする感情の相違 (羞恥と対人的不安)、あるいは立脚する理論的背景の相違により若干分類される状況も異なってくる。

さて本調査ではこれらの知見を参考に、予備調査の分類結果に基づき、まず

羞恥を引き起こす代表的な状況を選択する。そしてこれらの状況を多変量解析を用いて分類する。さらに本調査で得られた結果と橋本・清水（1981）を代表とする他の多変量解析を用いた研究、および従来の思弁的な研究結果との比較をおこなうことを目的とする。

① 方法

被調査者：大学生264名（男子142名，女子122名；平均年齢 19.3才，年齢幅 18～24才）であった。

質問紙の作成：予備調査の結果より，各カテゴリに分類された頻数を参考に羞恥を引き起こす状況を選択した。さらに橋本（1980），橋本・清水（1981），堤（1983）らの研究に示された羞恥を引き起こす状況例からも数項目選択し，計120項目からなる「状況別羞恥感情質問紙（Situational Shyness Questionnaire：以下 SSQ）」を作成した。

手続き：SSQ を大学生264名に集団で施行した。実施にあたっては SSQ の個々の状況を被調査者に想定することを求めた上で，恥ずかしさの程度を「まったく恥ずかしくない」から「非常に恥ずかしい」までの双極性の4件法で評定することを求めた。

② 結果および考察

SSQ を構成する120項目について主因子法で，共通性の推定には重相関係数の2乗（SMC）を用いた因子分析を行なった。因子軸の回転には Varimax 法を用いた。試行錯誤的に因子数を3～10程度まで変化させたところ，4因子で最も良いまとまりを見せたため，因子数を4に決定した。このうち，各因子に対する因子負荷量が0.40以上の項目を Table 2 に示し，同時に各因子ごとの固有値およびその累積寄与率を示す。この結果に従い，各因子について以下のように命名し，解釈した。

Table 2 各因子において因子負荷量が0.40以上の項目

FACTOR 1——「かっこの悪さ」の因子——		Factor
Item No.		Loadings
38.	みっともない髪型や服装をしている時。	.61
58.	人前で自分の行為がとがめられ、おこられた時。	.59
88.	自分一人、場違いな服装をしている時。	.57
84.	ストッキングや靴下が伝線したり穴があいていた時。	.55
40.	静かな教室でお腹が鳴った時。	.55
109.	自転車、スクーターなどでころんだ時。	.54
91.	人前で、けなされた時。	.54
102.	ズボンやスカートのチャックが開いているのに気がついた時。	.51
98.	駅のホームでいきなりころんだ時。	.51
106.	友達に自分の汚い部屋を見られた時。	.45
47.	水着を着ている時。	.45
34.	公の場で軽蔑された時。	.45
95.	家族の誰かが人から笑われることをした時。	.44
65.	友達と遊んでいて貧富の差を感じた時。	.42
48.	人前で失態を演じた時。	.42
13.	写真を見て変に写っていた時。	.41
99.	体格がスマートでないと思う時。	.41
103.	支払いの時、お金が足りないことに気がついた時。	.40
44.	友人の前で親に叱られた時。	.40
		Eigenvalute 24.826
		Cumulative Proportion 0.304
FACTOR 2——「気はずかしさ」の因子——		Factor
Item No.		Loadings
85.	初対面など、知らない人と話をする時。	.61
120.	大勢の前で自分の意見を発表した時。	.59
113.	異性におだてられた時。	.57
89.	異性から愛を告白された時。	.56
57.	好意を持っている人に話かけられた時。	.56
73.	大勢の前で自己紹介する時。	.55
115.	年上や目上の人と一対一で話をする時。	.54
107.	異性にみつめられた時。	.54
83.	多くの人の前でその人たちの視線を一度に浴びた時。	.53

112. 大勢の異性の中に、一人自分だけいる時。	.51
68. 昔好きだった人と出会った時。	.50
74. 恋人と歩いている時に友達にあった時。	.48
7. 作文など、自分の文章を人前で読まれた時。	.47
105. 人前で自分がほめられた時。	.46
104. 知らない人ばかりの中で、一人でいなければならない時。	.45
60. 電車等で、他人と目が合うなどして、目線のやり場に困る時。	.45
9. 好きな異性と話をする時。	.45
49. 好きな人に愛の告白をする時。	.43
31. あまり親しくない人に自分のことを話す時。	.43
59. ドレスやスーツを着た時などのように、いつもと違う服装をする時。	.42
71. 電話で友人の親がでてきた時。	.41
111. 出席等で名前を間違っ呼ばれた時。	.40
52. 老人などに席を譲る時。	.40
5. 長い間会っていない人(幼なじみなど)に会う時。	.40

Eigenvalue 5.146

Cumulative Proportion 0.370

FACTOR 3——「自己不全感」の因子——

Item No.	Factor Loadings
110. 自分のしたことを後悔する時。	.59
81. 自分にできるはずのことができなかった時。	.58
77. (約束の時間に遅刻した時など) 人に迷惑をかけた時。	.55
108. 自分が本当に悪い時。	.55
78. まちがったことを言った時。	.55
79. 他人に不快感を与えるような行動をした時。	.53
19. できると断言しておいて、できなかった時。	.53
117. 嘘をついたのがばれた時。	.53
42. 知ったかぶりをする時。	.52
12. 自分の(人格的)いたらしさを自覚する時。	.52
67. (よかれと思ってしたことが受け入れられなかった時など) 自分が誤解された時。	.51
43. 他の人にはできることが、できなかった時。	.51
75. 自分の不注意や失敗を叱られた時。	.50
97. グループから一人、のけものにされた時。	.44
3. 自分の思っていることをはっきりと話せない時。	.44

86. テストの点が悪かった時。		.42
		Eigenvalue 3.333
		Cumulative Proportion 0.415
FACTOR 4——「性」の因子——		
Item No.		Factor Loadings
26. ヌードやポルノシーンのポスターを見た時。		.73
116. ワイ談（セックスについての話）を聞く時。		.70
41. セックスについて話をする時。		.66
82. 異性の前でワイ談（セックスについての話）を誰かが話している時。		.64
20. 性的な夢を見た時。		.62
18. 胸をはだけている人を見た時。		.62
54. 街中でラブシーンを見た時。		.58
61. 異性が着替えているのを偶然見た時。		.57
24. トイレに行く時（特に人前、異性の前で）。		.49
17. 他人があまりにもはずかしい事をしている時。		.41
		Eigenvalue 2.852
		Cumulative Proportion 0.454

Factor 1は「かっこ悪さ」の因子と命名した。この因子は、「38. みっともない髪型や服装をしている時」、「58. 人前で自分の行為がとがめられ、おこられた時」などに代表されるように、自分の劣位性が公衆の面前で露呈した場面の項目から成り立っている。他者の存在が鍵であり、他者より自分が劣っていると思うことによって現れる羞恥感情である。この型の羞恥は恥辱的羞恥と言うことができよう。日常的には誰しもが頻繁に経験する類のもので、羞恥に関する過去の分類においても、必ず出現する型の羞恥である。またこの羞恥がBenedict (1946)の言う「恥」の概念に最も近く、作田(1967)、井上(1977)が指摘した「公恥」に相当する類の羞恥であると考えられる。

Factor 2は「気はずかしさ」の因子と命名した。この因子は「85. 初対面など、知らない人と話をする時」、「57. 好意を持っている人に話しかけられた時」などに代表されるように、対人接触状況の例が多いが、状況そのものは多岐に渡っている。例えば異性との相互作用（項目89, 107, 112）であるとか、

状況が自分にとって肯定的であるか否定的であるかは問わず、自分が他者の注視のまとなる場合（項目120, 73, 7, 105, 59）といった「はにかみ, 緊張, 照れ」的羞恥の項目, あるいは未知の人との相互作用（項目85, 60, 104）時に経験するいわゆる「気まずさ」に代表される「困惑」的羞恥の項目がそれぞれ混在している。菅原（1989b）は本研究での「気恥ずかしさ」の因子に対応する状況を細分化し、「対人緊張」, 「照れ」, 「対人困惑」と呼び区別して扱っている。このように「気恥ずかしさ」の因子は下位カテゴリを有する可能性をも示したが、全般に井上（1977）の指摘する「羞恥」の状況に相当する状況であると考えられる。

Factor 3は「自己不全感」の因子と命名した。この因子は「110. 自分のしたことを後悔する時」, 「81. 自分にできるはずのことができなかった時」などに代表され、自分の行動等について反省する場面の項目に因子負荷量が高まっている。この因子における羞恥は、自らが描く理想的自己像に達し得ない場合（項目81, 19）に代表される羞恥であり、具体的な他者の存否には比較的無関係で、自分の到らなさを自ら恥じるという自省の羞恥であると言えよう。この因子が、作田（1967）, 井上（1977）の言う「私恥」であり、Benedict（1946）がいみじくも無視したと言われる類の「恥」であると考えられる。

Factor 4は「性」の因子と命名した。この因子に高い負荷量を示す項目は「26. ヌードやポルノシーンのポスターを見た時」, 「116. ワイ談（セックスについての話）を聞く時」などの性的な状況が多い。性的な状況以外の項目も存在するが（項目24）, 因子負荷量は低いので、この因子は本質的には性の因子と見てもさしつかえないと思われる。ただし、この因子は固有値やその寄与率が相対的に低く、非常に弱小な因子である。したがって羞恥を引き起こす状況を大きなカテゴリに分類する場合には、その他の因子に吸収され無視される傾向の強い因子であると考えられる。

本研究の結果、羞恥を引き起こす状況から以上4つの因子が抽出された。こ

の因子分析の結果に従い、羞恥が引き起こされる状況を4つのカテゴリに分類し、そのカテゴリを「状況カテゴリ」と名付けた。

さてここで本研究における各状況カテゴリの分類と過去の研究における分類の相違点と一致点について Table 3 に基づいて、比較検討をおこなう。Table 3 は、本研究と過去の羞恥を分類した研究を対比して整理したものである。井上 (1977)、内沼 (1983)、Leary (1982) の研究は羞恥を類型化した思弁的な研究であり、羞恥を引き起こす状況そのものに関する分類ではないが、これらの研究も併記した。それ以外の研究は、羞恥を引き起こす状況を実証的に分類した研究であり、堤 (1983) を除きすべて多変量解析をその分類の基準に用いた研究である。

全体として見ると、諸研究が用いた方法の相違、あるいはその対象とした感情（対人不安あるいは羞恥）の相違により、重複しながらも微妙に異なった構造を示している。例えば Modigliani (1968)、Edelmann (1985)、Edelmann & McCusker (1986) らの照れ・当惑 (Embarrassment) 状況に関する研究では、状況カテゴリⅢ（自己不全感）に対応する羞恥を見いだしてはいない。菅原 (1989b) の研究でも、同様である。菅原 (1989a, 1989b) も述べるように、研究の対象が「羞恥」にある場合と「対人的（社会的）不安」にある場合では、その分類カテゴリが若干異なってくるのも当然であろう。すなわち、これらの分類結果の相違は単に研究間の研究対象の違いを反映したものであり、分類そのものの本質的相違ではなからう。

また、既に述べたように、Modigliani (1968)、Edelmann (1985)、Edelmann & McCusker (1986) らの研究は同じ Embarrassability scale を用いているにもかかわらず、その結果はこの3つの研究間で必ずしも一致していない。この理由はここでは触れない（詳しくは Edelmann, 1987参照）。ただこれらの一連の研究結果と本研究の結果を対比させると、状況カテゴリⅡ（気恥ずかしさ）が細分化され、下位構造を有する可能性を示している。われわれの Embarrass-

Table 3 状況の構造に関する各研究間の比較

研究者	分類方法	状況の分類					
		I (かっこ悪さ)	II (気恥ずかしさ)		III (自己不全感)	IV (性)	
本研究 橋本・清水(1981)	因子分析	かっこ悪さ 無様な行為 知識能力露見	異性	監視	きまり悪さ 家族 思い違い 不適當	自己不全感	性
	因子分析		気後れ、対人緊張	対人困惑	気後れ		
菅原(1989a)	クラスタ分析	公恥	照れ	対人緊張	対人困惑	気後れ	
菅原(1989b)	クラスタ分析	恥辱感	照れ	対人緊張	対人困惑		
Modigliani(1968)	因子分析	Factor 1	Factor 3		Factor 2, 4	Factor 5	
Edelmann(1985)	因子分析	CA	CA	EO, OB	EO, OB	EO	
Edelmann & McCusker(1986)	因子分析	AF	EO, VE, OB		EO, VE, OB	EO	
Crozier(1981)	因子分析	FNE	FLC				
梶(1983)	データに基づく 主観的分類	典型羞恥 被視感	照れ	公的羞恥		私的羞恥	低羞恥
		公恥	羞恥			私恥	
井上(1977)	思维的分類	公恥		間の意識の恥		私恥	
内沼(1983)		公恥				私恥	
Leary(1982)		Embarrassment	Shyness	Audience anxiety			

note: CA=Center of Attention, EO=Embarrassment to Others, OB=Other's Behavior, VE=Vicarious Embarrassment, AF=Appearing Foolish, FNE=Fear of Negative Evaluation, FLC=Fear of Lacking social Competence (分類の内容については、各論文を参照)

ibility scale 日本語版による状況の分類結果でも、やはり状況カテゴリⅠ（かっこ悪さ）と状況カテゴリⅡ（気恥ずかしさ）のそれぞれに対応するに分類され、状況カテゴリⅡ（気恥ずかしさ）状況に対応する状況がさらに「はにかみ、照れ、緊張」型羞恥と「困惑」型羞恥に細分化されるという結果を得ている（成田・寺崎・新浜、準備中）。さらに、橋本・清水（1981）、菅原（1989a, 1989b）らの結果からもこの状況カテゴリⅡ（気恥ずかしさ）の細分化の可能性は示唆される点である。

Leary（1982）の研究と本研究との比較でも上記の考察と同様の結果を示している。ただ彼の分類は従来の見解を経験に基づき思弁的に分類したのであり、必ずしも彼自身のデータにより実証した訳ではない。また羞恥に関する欧米人と日本人との比較研究の場合、Edelmann & Iwawaki（1987）が用いた比較文化的観点からの研究を行わないと具体的な一致点と相違点の実体の把握は難しい。しかし従来羞恥に関しては欧米と日本の両者の差異が強調されていた傾向が強かった（Benedict, 1946）にもかかわらず、大筋においては一致する点が見い出すことが可能であったことは非常に興味深く、今後の研究の指針の1つとなろう。

5. 結語および展望

以上述べたように、本研究は羞恥を引き起こす状況を整理し、それらを多変量解析を用いてカテゴリ化することにより、各状況の特徴を明かにすることを試みた。その結果4つの状況カテゴリの存在が明らかになった。結論として、本研究で見い出された羞恥感情を引き起こす状況の構造は、羞恥という大きな枠組みで捉えると、橋本・清水（1981）の研究結果、あるいはその他の思弁的な分類による研究によって明らかにされた構造と類似しており、それらを客観的、数量的な指標で、ある程度包括的に再編したものであると言えよう。ただ

し他の研究との比較より、状況カテゴリII（気恥ずかしさ）が下位構造を持つものとして捉えられる可能性が示唆された。このように研究の対象とする感情状態により、状況の分類は若干異なるが基本的には同じ構造を示すものであると言えよう。本研究でとりあげたこうした1つの観点—すなわち、状況の整理—から羞恥の問題について検討を加えてみると、この複雑な羞恥という感情をよりよく理解する一助になるのではなかろうか。

最後に今後の展望としていくつかの点を指摘しておこう。本研究は羞恥感情を引き起こす状況がそれぞれ異なっており、個々の状況において感情状態の差異をもたらすであろうという前提に基づいて研究を進めた。しかし、本研究のデータのみでは個々の状況カテゴリにおける感情状態の特徴については明確にはされていない。各状況カテゴリにおける感情状態が、それぞれ異なっていることは十分に予想されるし、実証的なデータとしてある状況における感情状態の差異を示した研究も存在する（Mosher & White, 1981；成田・寺崎・新浜, 1989；菅原, 1989a, 1989b）。また菅原（1989a）も指摘するように、従来の研究の多くは暗黙裏に、状況により主観的感情状態も異なるという事実を仮定している。よって今後の研究においては、どのような種類の状況が、どのような種類の「羞恥」を引き起こすのか、という点を明確にする必要がある。このことにより、個々の状況カテゴリの特徴を逆にその状態から解明することも可能であろう。さらに各状況の特徴が明らかになることで、羞恥が生起する原因をも探索することが可能になると考えられる。

また本研究で、羞恥を引き起こす状況を現象的（主観的、経験的）側面から分類したが、この事実をどのように理論的に捉えるかという点についてはさらに検討が必要である。今後は、羞恥感情の現状報告に留まらず、その発生メカニズムや原因を明らかにする羞恥理論を打ち立てることが必要となるであろう。

引用文献

- Benedict, R. 1946 *The chrysanthemum and the sword—patterns of Japanese culture*. Boston: Houghton Mifflin Co. (長谷川松治訳 1951 菊と刀 社会思想社.)
- Buss, A.H. 1980 *Self-consciousness and social anxiety*. San Francisco: W. H. Freeman.
- Clark, J.V., & Arkowitz, H. 1975 Social anxiety and self-evaluation of interpersonal performance. *Psychological Reports*, 36, 211-221.
- Cheek, J.M., & Buss, A.H. 1981 Shyness and sociability. *Journal of Personality and Social Psychology*, 41, 330-339.
- Crozier, W.R. 1979 Shyness as a dimension of personality. *British Journal of Social and Clinical Psychology*, 18, 121-128.
- Crozier, W.R. 1981 Shyness and self-esteem. *British Journal of Social Psychology*, 20, 220-222.
- Crozier, W.R. 1986 Individual differences in shyness. In W.H. Jones, J.M. Cheek, & S.R. Briggs (Eds.), *Shyness: Perspectives on Research and Treatment* (pp. 133-145). New York: Plenum Press.
- Edelmann, R.J. 1985 Individual differences in embarrassment: self-consciousness, self-monitoring and embarrassability. *Personality and Individual Differences*, 6, 223-230.
- Edelmann, R. J. 1987 *The psychology of embarrassment*. Chichester: John Wiley & Sons.
- Edelmann, R.J. & McCusker, G. 1986 Introversión, neuroticism, empathy and embarrassability. *Personality and Individual Differences*, 1986, 7, 133-140.
- Edelmann, R.J., & Iwawaki, S. 1987 Self-reported expression and consequences of embarrassment in the United Kingdom and Japan. *Psychologia*, 30, 205-216.
- 橋本恵以子 1980 羞恥感情の研究 (1)—大学生を対象に— 聖母女学院短期大学研究紀要, 9, 106-110.
- 橋本恵以子 1986 羞恥感情の研究 (5)—男子成人を対象に— 聖母女学院短期大学研究紀要, 15, 73-82.
- 橋本恵以子・清水哲郎 1981 羞恥感情の研究 (2)—羞恥感情構造の因子分析— 聖母女学院短期大学研究紀要, 10, 88-93.
- 橋本恵以子・清水哲郎 1982 羞恥感情の研究 (3)—発達差の側面から— 聖母女学院短期大学研究紀要, 11, 149-156.
- 橋本恵以子・清水哲郎 1984 羞恥感情の研究 (4)—女子成人を対象に— 聖母女学院

- 短期大学研究紀要, 13, 58-68.
- Hashimoto, E., & Shimizu, T. 1988 A Cross-cultural study of the emotion of shame/embarrassment: Iranian and Japanese children. *Psychologia*, 31, 1-6.
- 井上 忠司 1977「世間体」の構造 NHK ブックス.
- 木村 易 1978 感情 大山正, 藤永保, 吉田正昭(編) 心理学小辞典 (pp. 44-45) 有斐閣.
- Leary, M.R. 1982 Social anxiety. In L. Wheeler (Ed.), *Review of personality and social psychology* Vol. 3 (pp. 97-120). Beverly Hills, CA: Sage.
- Leary, M.R. 1983 Social anxiousness: The construct and its measurement. *Journal of Personality Assessment*, 47, 66-75.
- Lewinsky, H. 1941 The nature of shyness. *British Journal of Psychology*, 32, 105-113.
- Modigliani, A. 1968 Embarrassment and embarrassability. *Sociometry*, 31, 313-326.
- 森口 兼二 1953 羞恥—社会心理学的考察— 人文学報(京都大学人文科学研究所), 3, 1-46.
- Mosher, D.L., & White, B.B. 1981 On differentiating shame and shyness. *Motivation and Emotion*, 5, 61-74.
- 成田 健一・寺崎 正治・新浜 邦夫 1989 羞恥感情を引き起こす状況の特徴—感情状態を指標として— 日本心理学会第53回大会発表論文集, 863.
- 成田 健一・寺崎 正治・新浜 邦夫 準備中 羞恥感情を引き起こす状況の分類— Embarrassability scale を用いて—.
- Russell, D., Cutrona, C.E., & Jones, W.H. 1986 A trait-situational analysis of shyness. In W.H. Jones, J.M. Cheek, & S.R. Briggs (Eds.), *Shyness: Perspectives on Research and Treatment* (pp. 239-249). New York: Plenum Press.
- 作田 啓一 1967 恥の文化再考 筑摩書房.
- Sattler, J.M. 1965 A theoretical, developmental, and clinical investigation of embarrassment. *Genetic Psychology Monographs*, 71, 19-51.
- 園原 太郎 1934 羞恥感の心理学的研究 心理学研究, 9, 105-148.
- 菅原 健介 1988 コミュニケーション事態における対人不安傾向の研究—不安とぎこちないコミュニケーション行動との関連をめぐって— 日本心理学会第52回大会発表論文集, 267.
- 菅原 健介 1989 a 対人的不安の類型化に関する研究 人文学報(東京都立大学人文学部紀要), 205, 91-107.

- 菅原 健介 1989 b 対人的不安の類型に関する研究—言語的表現のパターンに基づく
体験事例の分類— 日本心理学会第53回大会発表論文集, 249.
- Teglasi, H., & Hoffman, M. A. 1982 Causal attributions of shy subjects. *Journal
of Research in Personality*, 16, 376-385.
- 堤 雅雄 1983 羞恥論への予備的考察 島根大学教育学部紀要 (人文・社会科学
編), 17, 1-7.
- 内沼 幸雄 1983 羞恥の構造 紀伊国屋書店.
- Zimbardo, P. G. 1977 *Shyness*. Massachusetts: Addison Wesley, 1977. (木村駿訳
1982 シャイネス I, II 勁草書房.)
- 成田健一 大学院博士課程後期課程——
——寺崎正治 文学部非常勤講師——
——新浜邦夫 文学部教授——